

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K10261

研究課題名(和文)臨床看護師の臨床的論証力の向上支援プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of a Support Program to Improve Clinical Reasoning of Nurses

研究代表者

岡田 純子 (OKADA, JUNKO)

京都橘大学・看護学部・准教授

研究者番号：70636109

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究目的は、臨床看護師の臨床的論証向上支援プログラムを開発することである。プログラムは臨床看護師62名を介入群とコントロール群に分けて実施し、4回の調査を行った。その結果、「看護師の問題解決行動自己評価」、「看護実践における行為の振り返り」、「メタ認知」、「ラサター臨床判断ルーブリック」において、有意な差が見られた。また、受講生の研修満足度の高さを測定する「DASH-SV」において、満足度が優位に高いことが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護師の臨床的論証の向上に効果のあるプログラムはこれまで存在しなかった。このプログラムによって臨床的論証を習得した看護師は、臨床の場で患者を多面的に理解することができるようになる。看護師のこのような理解が、多様で複雑な臨床の状況において、患者にとって最も重要なことを認識し、最良の看護を導くことにつながる。その結果、患者は、個性や満足度の高い看護を受けることができる。すなわち、このプログラムは、看護の質向上において意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop a support program to improve the clinical reasoning of clinical nurses. The program was divided into an intervention group consisting of 62 clinical nurses and a control group, and four studies were conducted. As a result, "self-evaluation of problem-solving behavior of nurses" which is the result of clinical reasoning, "review of behavior in nursing practice", "metacognition", and "Lasater clinical judgment rubric" which are the practice status of clinical reasoning, there was a significant difference between the intervention group and the control. It was also found that "DASH-SV", which measures student satisfaction with training, shows extremely high satisfaction.

研究分野：看護管理学

キーワード：臨床的論証 臨床看護師 教育プログラム

### 1. 研究開始当初の背景

看護は複数の学問領域を拠り所としているが、個々の症例に関わる実践の場においては、科学だけでは十分に説明できない状況にも遭遇する ( Benner, et al., 2009 / 2015 )。このような状況において看護師が、関連性のある科学を有効に選択し活用するためには、事態が展開する中で、患者や家族の懸念や脈絡とともに、その臨床状況について論理的に考える、臨床的論証が必要となる。臨床的論証とは、その患者への細心の注意と、その患者が看護師の行為にどのように反応するかということに対する細心の注意を伴う、気づき、解釈、対応の反復プロセスである ( Benner, et al., 2009 / 2015 )。看護実践は状況依存的であり、看護の対象や状況によって具体的な援助内容が変化するという特徴を持つ。したがって、看護師には、関連する情報を把握し、看護を必要とする人や看護場面の状況を深く理解し、そこから適切な看護を判断する能力の向上が求められる。また看護師が、自らが行った論証をはっきりと説明できることは、誤った想定をしていないか、臨床状況の性質が誤っていないかということの確認につながり、リスクの高い急性期ケアの環境において、安全性を高めることに貢献する ( Benner, et al., 2009 / 2015 )。以上から、看護師には臨床的論証を行う能力の向上が求められており、看護師の臨床的論証の向上を支援するためのプログラムの開発が必要と考えた。

### 2. 研究の目的

本研究目的は、臨床看護師の臨床的論証向上支援プログラムを開発することである。そのため、クリニカルラダーレベル に相当する看護師への面接および国内外の文献検討をもとにプログラム案を作成し、院内教育の専門家による専門家会議によって内容の検討を行い、パイロットスタディによるプログラムの内容妥当性・実用性・有益性の検討を行う。その検討にもとづき作成した臨床看護師にプログラムを実施し、その効果を評価する。

### 3. 研究の方法

1) クリニカルラダーレベル に相当する看護師への面接および国内外の文献検討  
臨床看護師の臨床的論証について明らかにするため、近畿圏内の一般病院に勤務する看護師 5 名に対して、個別に半構成的面接を行った。面接では、『看護実践において優れた臨床的論証を行ったと思う事例』を想起してもらい、事例の具体的な内容、その臨床状況の理解、判断、根拠、その状況においてその患者に行った臨床的論証とその結果についてききとった。面接内容は同意を得て ICレコーダーに録音した。分析は、録音した内容から逐語録を作成し、生データのニュアンスを損なわないよう配慮しながら 1 ストーリーを 1 データとしてまとめた。データを質的に分析し、臨床的論証が語られた部分を抽出し、抽象度を上げてカテゴリーを生成した。文献検討では、成人学習理論や経験学習理論に関する書籍、教育プログラム、院内研修、看護師研修などをキーワードとした論文を抽出し、学習目標の設定、教育方法、使用する教材、評価の考え方について書かれた部分を参考に、プログラム ( 案 ) を作成した。

#### 2) 院内教育の専門家による専門家会議

院内教育責任者の役割を担った経験を有する看護師および、専門看護師としての勤務経験が 5 年以上の看護師、合計 5 名を研究参加者とし、フォーカスグループディスカッションを実施した。ディスカッションでは、シミュレーションシナリオとワークシートをもとに、プログラムの内容妥当性・実用性・有益性を検討した。それらの内容を統合し、出された意見を整理した。

#### 3) パイロットスタディによるプログラムの内容妥当性・実用性・有益性の検討

総合病院に勤務する経験 2~3 年を有する看護師 3 名を対象にパイロットスタディを実施した。データ収集には、2 回のグループ面接と 4 回の調査票による調査を実施した。面接では、プログラムの時間配分や説明のわかりやすさ、シミュレーションの受けやすさ、臨床的論証の理解について意見を求めた。調査内容は、看護実践における行為の振り返り、メタ認知、デブリーフィングの質評価などとした。調査票への記載内容および面接で語られた内容をもとに実行可能性を検証した。

#### 4) 臨床看護師の臨床的論証力の向上支援プログラムの実施と評価

総合病院に勤務する、経験 2~3 年を有する看護師を対象にプログラムを実施した。プログラムは、介入群とコントロール群における事前・事後テストの準実験デザインとした。研究参加者は、便宜的に抽出した施設に勤務する看護師 407 名に参加を依頼するチラシを配布し、承諾が得られた 62 名とした。プログラム実施に際し、参加者を事前調査の段階から介入群とコントロール群に分けた。プログラムは、事前学習と 2 回の研修から構成し、参加者全員に対して、1 回目研修の 2 週間前に事前学習課題を配布した。1 回目研修には全員が参加し、シミュレーションを行った。シミュレーション後に介入群とコントロール群に分かれ、介入群にはガイドを用いたデブリーフィング、コントロール群にはガイドを用いた振り返りの会を実施した。2 回目研修は介入

群のみに実施し、内容は1回目研修でのシミュレーションの動画視聴とデブリーフィングとした。研修ではオリジナルのワークシートを用い、ワークシートへの記載内容を活用し、デブリーフィングガイドに沿ってデブリーフィングを行った。調査内容は、基本属性、看護師の問題解決行動自己評価尺度(服部ら, 2010)、看護実践における行為の振り返り(尾形, 2015)、成人用メタ認知(阿部ら, 2010)、ラサター臨床判断ルーブリック(細田ら, 2018)、DASH-SV(Simon et al., 2009/2014)、プログラムに関する補足質問とし、調査は4回行った。

#### 4. 研究成果

1) クリニカルラダーレベルに相当する看護師への面接および国内外の文献検討  
エキスパートナースの臨床的論証として、19サブカテゴリーから、【対象者を理解するための視点】、【積極的な関与】、【心の動きに添う】、【その人らしい生を支える】、【広い視野での推論】、【協力体制整備のための工夫】、【看護の方向性の定まり】という7カテゴリーが抽出された。エキスパートナースの臨床的論証のプロセスは、直接観ることによってその患者を理解することや、患者と感情的に関わることに加え、広い視野で他者を見ること、個々のスタッフの看護実践レベルへの理解といった、エキスパートナースに特徴的な視点に基づく思考であった。また、文献検討にもとづき、プログラムの概要は、Kolb(1984)の経験学習モデルを参考に作成した。シミュレーションシナリオには、学習目標、シミュレーションのための場面設定、患者の背景と現在の状況、事前学習課題を含め、ワークシートは、リフレクティブ・サイクル(Gibbs, 1988)を参考に項目を設定した。そのほか、介入群用のデブリーフィングガイド、コントロール群用の振り返りの会のガイドを作成した。

#### 2) 院内教育の専門家による専門家会議

事前課題内容と提示の時期は適切で、内容に矛盾はなく有益性があること、実施する人数についても適切であるなどの意見が得られた。研究参加者の経験年数を考慮し、シミュレーションシナリオに、患者の背景や心理・社会的側面の情報を追加する、事前学習内容や当日の役割を具体的に示す必要があるとの意見を得た。ワークシートについては、デブリーフィング前後での自分の思考の変化に気づけるような構成となっており、研修での学びを病棟で活かせる内容であるとの評価を得た。ワークシート内の項目の表現が一部わかりにくいので、具体的に記載する必要があるとの意見を得た。

#### 3) パイロットスタディによるプログラムの内容妥当性・実用性・有益性の検討

グループ面接の結果、研修の時間配分は院内研修と比較して適切であるが、ワークシートや調査票の記載に時間がかかるとの意見が得られた。シミュレーションは、臨床状況の再現や患者の設定についてのリアル感や、患者の家族がいないことにより受けやすかったとの意見が得られた。映像の視聴では、映像を見て患者の様子の違いに気づけたとの意見があり、デブリーフィングで当時の思考について振り返ることができていた。また、ワークシートに沿った振り返りによって臨床的論証の理解が促され、前提への気づきとその重要性への理解が得られていた。さらに、自分が行おうとしている看護が良いかどうか、相手の反応を見て考えながら実践することの重要性を理解することができていた。戸惑ったことや困ったこととして、看護師役をしていない者からは意見が言いにくいことがあげられた。これらを踏まえプログラムに加筆することとした。以上から、プログラムの内容妥当性、実用性・有益性が確認された。

#### 4) 臨床看護師の臨床的論証力の向上支援プログラムの評価

研究参加の承諾と4回の調査への回答が得られた、介入群33名、コントロール群24名を分析対象とした。群間比較のため、Mann-WhitneyのU検定を行った。

##### (1) 看護師の問題解決行動自己評価

各時点での下位尺度ごとの得点の群間比較では、実施前の時点で、【 .問題解決に向け患者の意向を確認する】(U=275.5, p=0.048)に有意な差が見られた。終了後の時点で、【 .問題解決に向け患者の意向を確認する】(U=245.0, p=0.013)、【 .問題の優先順位を見極め患者の要望に柔軟に応じる】(U=215.0, p=0.003)、【 .患者が拒絶する援助を受け入れられるよう説得する】(U=186.0, p=0.001)、【 .患者自身が問題を解決できるよう支援する】(U=257.0, p=0.023)、【 .個別状況に応じて援助を工夫する】(U=251.0, p=0.017)、【 .援助の効果を判定して支援する】(U=241.0, p=0.010)の6下位尺度において、有意な差が見られた。下位尺度ごとの、実施前と終了後の得点差の比較では、【 .問題の優先順位を見極め患者の要望に柔軟に応じる】(U=241.5, p=0.012)、【 .患者が拒絶する援助を受け入れられるよう説得する】(U=226.0, p=0.006)、【 .個別状況に応じて援助を工夫する】(U=214.5, p=0.003)、【 .援助の効果を判定して支援する】(U=221.0, p=0.004)において、有意な差がみられた。このことから、本プログラムに参加することによって、自身の思考に焦点をあてることや、メタ認知の活用について学び、患者がどのようなことに懸念や苦痛を感じていると自分は理解しているか、他にどのような考え方ができるかといったことを考えられるようになったということが言える。また、シミュレ

ーションや実際の臨床場面において実践したことを振り返り、患者にとって最良の看護ケアにつなげるためにはどのような思考をする必要があるのか、ということと一緒に考え学んでいく本プログラムの有効性が確認された。

#### (2) 看護実践における行為の振り返り

各時点での下位尺度ごとの得点の群間比較では、実施前に有意差はみられなかった。1回目研修後の時点で、第 因子【医療チーム状況の把握】(U=537.0, p=0.018)で有意差がみられた。また、終了8週間後の時点において、第 因子【患者・家族の意向の吟味】(U=257.5, p=0.02), 第 因子【看護師の役割の認識】(U=252.5, p=0.018), 第 因子【治療の状況の把握】(U=220.5, p=0.003)で有意差がみられた。下位尺度ごとの、実施時期間の得点差の群間比較では、1回目研修後と2回目研修後の得点差で、第 因子【医療チームの状況の把握】(U=256.5, p=0.021)に有意差がみられた。1回目研修後と終了後の得点差で、第 因子【患者・家族の意向の吟味】(U=245.0, p=0.014), 第 因子【看護師の役割の認識】(U=261.5, p=0.029), 第 因子【医療チームの状況の把握】(U=198.5, p=0.001), 第 因子【治療の状況の把握】(U=239.5, p=0.009)に有意差がみられた。2回目と終了後の得点差で、第 因子【患者・家族の背景の把握】(U=252.5, p=0.018), 第 因子【治療の状況の把握】(U=272.5, p=0.038)に有意差がみられた。実施前と実施後の得点差では、第 因子【患者・家族の意向の吟味】(U=238.0, p=0.010), 第 因子【看護師の役割の認識】(U=262.5, p=0.029), 第 因子【治療の状況の把握】(U=189.5, p=0.001)に有意差がみられた。これらの結果は、本プログラムによって参加者が、自身の看護実践を振り返るといふことの価値や重要性や方法を理解することができたことを示している。

#### (3) ラサター臨床判断ルーブリック

各時点での下位尺度ごとの得点の群間比較では、実施前の時点で【反応】(U=524.5, p=0.034)に有意差がみられたが、それ以外の下位尺度では、どの時点にも有意差はみられなかった。下位尺度ごとの、実施時期間の得点差の群間比較では、実施前と2回目研修後で【気づき】(U=269.0, p=0.037),【解釈】(U=257.5, p=0.022)に有意差がみられた。【気づき】については、1回目研修後と2回目研修後(U=238.5, p=0.009), 1回目研修後と終了後(u=235.0, p=0.007), 実施前と終了後(U=246.0, p=0.013)において、有意差がみられた。

#### (4) 研修の満足度(DASH-SV)

両群の比較では、以下のすべての質問項目で有意差がみられた。【インストラクターは積極的に参加できる学習環境を創出した】(U=274.50, p=0.039),【インストラクターは積極的に参加できる環境を維持した】(U=193.00, p=0.001),【インストラクターはデブリーフィングの有効な枠組みを確立した】(U=105.00, p<0.001),【インストラクターは私自身のパフォーマンスを振り返るような深い議論を促した】(U=161.00, p= p<0.001),【私たち学習者の成功した点, 失敗した点, 更にその理由をインストラクターは的確に同定した】(U=213.00, p=0.002),【インストラクターは私がどのように高いパフォーマンスレベルに到達し, それを維持するための方法を私が理解する手助けをした】(U=238.50, p=0.007)。このことから、介入群の研修満足度が学習効果につながったことが示唆された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 岡田純子	4. 巻 46
2. 論文標題 看護におけるclinical reasoningの概念分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都橋大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 93-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡田純子, 志田京子	4. 巻 48
2. 論文標題 経験2~3年を有する看護師のクリニカルリーズニング向上支援プログラムの内容妥当性・実用性・有益性の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都橋大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 173-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡田純子, 森嶋道子, 梶谷佳子, 中橋苗代	4. 巻 30
2. 論文標題 一般病院に勤務するエキスパートナースの臨床的論証プロセス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本医学看護学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Junko Okada
2. 発表標題 Concept Analysis of Clinical Reasoning in Nursing
3. 学会等名 EAFONS2020（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Junko Okada
2. 発表標題 Validity, Practicality, and Usefulness of a Support Program to Improve Clinical Reasoning of Nurses with Two to Three Years of Work Experience
3. 学会等名 East Asian Forum of Nursing Scholars Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田純子, 森嶋道子, 梶谷佳子, 中橋苗代
2. 発表標題 急性期病院に勤務するエキスパートナースが実践する臨床的論証
3. 学会等名 日本看護学教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

#### 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	梶谷 佳子 (Kajitani Yoshiko) (40224406)	京都橘大学・看護学部・教授  (34309)	
研究分担者	中橋 苗代 (Nakahashi Mitsuyo) (60454477)	京都橘大学・看護学部・准教授  (34309)	
研究分担者	森嶋 道子 (Morishima Michiko) (80647785)	天理医療大学・医療学部・講師  (34606)	

#### 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------